

全体的な大きな取り組みは、作業を中心に、毎月の行事や社会資源を積極的に利用しながら経験を積み、「好きなこと・嫌いなこと」「できること・できないこと」を自分自身が知る機会になるよう支援を継続して行いました。4月には、恒例となりました関西電力の方たちとのボウリング大会、難波特別支援学校のグラウンドをお借りしての運動会、親子バスツアーでは、大阪サポート協会より助成金をいただき、京都水族館と嵐山を散策してきました。1月には錦城ライオンズクラブのご協力により、餅つき大会を開催し、多くの体験から多くのことを学ぶことができました。利用者にとっても職員にとっても貴重な経験となりました。新たな取り組みとしては、特別支援学校卒業後は、運動の機会が減ってしまったとの声から、普段身体を動かす機会の少ない、知的障がい者を対象に、障がい者スポーツへのプロジェクトに参画しました。リハビリテーション人材養成大学、プロサッカーチーム、スポーツ推進団体、大阪市内の施設が連携し、「フレンドリーアクション」として、12月には、フレンドリーアクションフェスティバルをJグリーン堺で開催しました。

また、京都馬主協会より助成金をいただき、身体障害者用のトイレを、オストメイトを備えた多目的トイレとして改修しました。

【港育成園】

生活介護事業では、利用者一人ひとりの個性に合わせた、促し方や伝え方、関わり方などを行いながら、少しずつでもできることやよい評価をされることが多くなり、自信や達成感を持ってもらえるような支援を心がけました。

従来の作業活動に加え、創作活動として、季節を感じる事のできる作品作りを取り入れました。慣れない取り組みで利用者だけでなく支援者側もどのような提供の仕方が伝わりやすくまた取り組みやすいのかを試行錯誤しながらの取り組みでしたが、出来上がった作品を作業室や玄関に飾りつけたときは皆さん満足そうな表情が印象的でした。

就労継続支援B型事業では、仕事に取り組むとことを意識してもらえるような促しや伝え方を工夫しました。昨年度より、「正確に仕上げる」「納期を守る」などを目標に取り組んできたことで、受注業者からも優先して作業をいただけるようになり、途切れることなく作業日課に取り組むことができ、利用者は、社会に貢献できる喜びを大いに感じていたと思われま

す。生活介護事業・就労継続B型事業とも利用者一人ひとりに関わる支援については、個別支援計画の具体化に取り組み、利用者一人ひとりの特性に応じた支援計画の作成を目指しました。

休日活動を実施し、保護者も一緒に参加していただけるように企画をしました。昨年以上に多くの保護者が参加され、他の利用者やその家族とふれあうことができよかったです。とお話を頂きました。

【港第二育成園】

多機能型事業所として2年目となる今年度も、これまでの取り組みを変えることなく《企業就労》を目指し、作業訓練ならびに生活訓練指導を行いました。年度前半は求人が少なく、就労する力を身に付けた人もチャンスが無いなど厳しい状況でありましたが、障害者雇用率の改正に向けてか後期は新規雇用する企業も増え、10名が企業就労を果たしました。一方で、会社の閉鎖や職場環境の変化で退職を余儀なくされ、3名が施設を再利用することになりました。

経営面では、就労移行事業所の共通の課題として、年度途中で就職が決まり退所者が出た時の新規利用者の確保がありますが、この点については十分な解決策を見いだせず、年度末には5名の定員割れとなりました。

今後は、港エリアで展開しているサービスを相互に有効活用し、より魅力ある施設としてアピールし利用者の増加を目指していききたいと思います。

【ワークスいけじま】

平成24年度より男性1名、女性1名が新たに入所し20名定員でサービスを行いました。平均年齢が48歳を超えましたが作業に対する意欲や誇りは高く、日課は生産活動を中心に取り組んできました。ただ、勤労意欲に反比例し高齢による体力・集中力の低下が現れ、長時間の内職作業に限界を感じる場面が見られました。出席率（稼働率）に影響を与える事が考えられた為、作業時間を短縮し、日課の中にストレッチ、ウォーキングを取り入れ作業に対する集中力を高めるとともに勤労意欲も満たす事を目標としました。

健康面については毎月、血圧、脈拍、体重、体脂肪率を計測し推移をデータ化するとともに健康だよりとして、本人やご家庭に情報提供し、健康管理の目安としました。また、健康だより等を材料に体重管理に対する気づきを促し、面談を通して夕方からもウォーキングを行うグループを作り、希望者ウォーキング